國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究：霊祭・霊社・神葬祭

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 久史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001778

「近世国学の霊魂観をめぐるテキストと実践の研究―霊祭・霊社・神葬祭―」

プロジェクト責任者　松本久史

事業概要

本事業は、国学者の霊魂観・死生観や死に関わる諸儀礼（葬儀、霊祭など）について、実証的な方法で明らかにする。従来の研究においては死生観・霊魂観は専ら思想史分野のテキスト分析が中心であり、一方葬儀、霊祭などの実践的分野は史資料からの実証的研究が主であり、両者、つまり思想と実践の関係は必ずしも明らかではなかった。本事業の特徴的な点は、テキストの内容分析にとどまることなく、テキストの成立、流通などを含めた、当該テキストの社会史的文脈の把握、地域の神職や国学者らによる葬儀・霊祭など社会的実践の実証的理解と、そこでのテキストの用い方や関係する情報の共有のあり方などの分析を通して、近世国学の霊や死後をめぐる思想と実践をトータルに理解することを目的としていることである。具体的には下記の各項目にしたがって事業を進めている。

Ⅰ国学の霊魂観関係の主要テキストの分析
（1）国学者の霊魂論・幽冥論
（2）神葬祭関係書の収集と調査
Ⅱ神葬祭・霊祭・霊社建立を中心とした社会的運動の分析
（1）鈴門における霊魂観と実践―霊祭・霊社・神葬祭―
（2）平田国学における幽冥観の拡散・多様化と実践
Ⅲ研究成果の公開

平成21年度の事業実施計画
Ⅰ（1）国学者の霊魂論・幽冥論関係テキストの調査・収集、『霊能真柱』精読会、校注作業
（2）神葬祭関係書の調査・収集・分析
Ⅱ（1）鈴門の霊祭運動と神葬祭の調査・分析
（2）平田家のイエの祭祀の調査、平田国学影響下の幽冥思想に関する調査・研究
Ⅲ『神葬祭資料集成』増補文献リストの作成、「近世から近代初頭における国学の霊魂観」ミニ・シンポジウムの主催、高玉家文書（翻刻）原稿作成、出版準備

本年度は3カ年計画の2年目として、昨年度の成果を継承しつつ、3年目での成果を視野に収めた活動を行った。

Ⅰ国学の霊魂観関係の主要テキストの分析

国学者の霊魂論や幽冥論に関する著作を調査･収集しその研究成果を発表するとともに、本居文庫本『霊能真柱』を精読する研究会（「霊能真柱を読む会」）を隔週で開催した［Ⅰ（1）］。また『霊能真柱』のHTML化作業は8割程度まで進展し、精読についても上巻をほぼ読了した。なお、研究会には機構内の教員や大学院生なども参加している。22年度は引き続き国学者の霊魂観・幽冥論に関する研究成果を発表しつつ、『霊能真柱』ネット公開のためにHTML化作業を早期に完了し、体裁

を整えていく予定である。

研究成果として、三ツ松誠は『霊能真柱』を分析して「学者と講釈師のあいだ―平田篤胤『霊能真柱』における安心論の射程―」(『死生学研究』13、2010年3月)、安政の大獄の首謀者としては著名であるが、鈴門系の国学者でもあることはあまり知られていない長野義言(主膳)の霊魂観・幽冥観に着目し、「長野義言の「霊魂考」」(『東京大学日本史学研究室紀要』別冊「近世政治史論叢」、2010年3月)を発表するなど、テキストと実践との関係について考察を深めた。小林威朗は津和野藩神葬祭運動の中心人物である国学者、岡熊臣の霊魂観のテキスト分析を前年度から継続して行い、平成21年12月に國學院大學で開催された神道宗教学会第63回学術大会において「『霊の梁』について」の題で口頭発表を行った。

神葬祭関係書の調査については[I(2)]、東丸神社所蔵東羽倉家文書を用いて、松本久史が「荷田派の霊魂観と実践―他界の認識を巡って―」(『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第4号、平成22年3月)を発表した。荷田春満を中心として、門人(荷田派)の霊魂観を分析したものであって、霊祭と神葬祭の実施に深く春満の思想が関わっているとともに、後世の篤胤の構築した霊魂観・他界観とは異なる荷田派の霊魂観を明らかにして、本居宣長以前の国学者の霊魂観研究を進展させた。

II 神葬祭・霊祭・霊社建立を中心とした社会的運動の分析

(1)の鈴門の霊魂観について考察する手がかりを獲得するべく、遠州の本居派門人を中心に、資料の調査・収集を実施した。平成21年8月に、松本久史と三ツ松誠が、静岡県掛川市の大日本報徳社図書館、湖西市白須賀の湖西市立おんやど白須賀、新居町立関所資料館を調査地として、鈴門系の国学者である夏目甕麿、石川依平、高須元尚といった国学者に関係する資料を対象に行なった。甕満、依平は鈴門の重鎮であるとともに、近世国学者の霊魂観をめぐる論争である「『三大考』・『霊能真柱』論争」にも関連しており、また遠江国は春満以来、国学の道統を受け継いだ地域でもあって重要である。調査においては杉浦国頭や石川依平の著作や関係資料を閲覧し、さらに本居派国学者が篤胤に向けた批判をまとめた『天説弁々の弁』の写本を撮影した[I(1)にも関連]。また、白須賀では夏目甕麿の生地跡などをも踏査した。

(2)については、国学的霊魂観を考える上で重要である、平田家の活動に関する調査を行った。具体的には、平成22年2月に、松本久史、中野裕三、小林威朗、三ツ松誠、それに菅浩二(研究開発推進センター准教授)も加えて、篤胤直筆の稿本が所蔵されている秋田県公文書館を調査先に設定して、諸資料を採訪した。その結果、『印度蔵志』やいわゆる「大意もの」の自筆稿本約60点を撮影した。この調査で得られた資料は、特に『霊能真柱』の成立過程や背景を理解するために用いる予定である。また、三ツ松誠は幕末・維新期の気吹舎門人である三輪田元綱の安政期の活動を調査し、平田派の霊魂観と政治・社会実践との関係を分析し、「異国と異界―安政期の三輪田元綱―」(『神道宗教』216号、平成21年10月)を発表した。

III 研究成果の公開

以上のような日常的な調査研究活動の成果の公開についても、21年度は積極的に行い、平成22年1月21日に國學院大學においてミニ・シンポジウム「死と霊魂をめぐる国学者のいとなみ―現実のなかの死生観―」を開催した。発表者に早稲田大学大学史資料センターの中川和明氏を招き、近世中期から後期にかけて広い視野での霊魂観と実践の議論がなされた(詳細は遠藤潤による同シンポジウ

ムの報告を参照)。また、遠藤潤は國學院大學オープン・リサーチ・センター推進事業「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」において、平成21年10月に北海道滝川市の國學院大學北海道短期大学部で開催された、一般市民も対象にした公開講座「國學院の古代研究」では、「近世国学の古代研究―平田篤胤を焦点として―」の題で発表し、平成22年1月には奈良県天理市の天理大学おやさと研究所宗教研究会「教祖論・開祖論の構築・脱構築」において、「平田篤胤と気吹舎―教祖論・開祖論からみた「大人」と門人組織―」を発表するなどして、篤胤を中心に本事業の成果の一部を公開している。また、上記「霊能真柱を読む会」と隔週で、平田銕胤書簡を多数含む高玉家文書の読解を進め、既翻刻部分についての校正・確認作業を行った。さらに、中野裕三は近代の招魂祭の祭詞の分析を進め、その成果を「招魂祭詞に見られる霊魂観―近世国学者の霊魂観との比較―」(『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第4号、平成22年3月)として発表した。

平成22年度の事業展開

本事業の計画は事業スタッフのみならず、機構内の教員や、学内外の研究者とも連携しつつ進められている。平成22年度をもって本事業は終了するが、冒頭に掲げた期間全体の研究計画を予定に沿って着実に実行していくことによって、本学の国学研究の継承・進展に寄与していきたいと考えている。すなわち、将来的には本事業の成果を中核としつつ、機構内に加えて学内で遂行されている国学関係の研究諸事業との連携を、たとえば、共同の研究会を企画すること、デジタルミュージアムの活用などを通じて推進することを構想している。本事業は機構が発足したばかりということもあって、研究規模・予算ともに最小限で進めてきたが、今後は、大学全体の研究ネットワークを形成し、数多くの教員・研究者の参加を求めていき、機構および日本文化研究所が、設立以来有している国学研究の拠点としての機能を果たし続けていけるように努めていきたい。